

岐阜県支部だより

- 1 巻頭言
- 2 支部研修会報告
- 3 全国大会報告
- 4 事務局より

巻頭言

「伝えていきたいこと」



岐阜県支部 顧問 西山 史子

岐阜県支部が設立されて今年で24年。月日の経つのは早いもので、当時、県支部が立ち上がるビッグニュースを知って、すぐ小松先生に電話をしたら「あんたで二人目や」と言われたことをつい昨日のここのように思い出します。

この夏、研究紀要第7版を読ませていただきました。今回執筆された先生方の実践例は、子どもたちと子どもたちを取り巻く周りとの関わりの中で、どう育てられたかというどれも労作に頭の下がる思いがし、また、そのために必要な知識や家族療法等のさまざまな方法の研鑽を積んでいらっしゃることに敬意の念を覚えました。また、資料の「岐阜県支部の歩み」を読ませていただき、会員の方々のお力で「学校教育相談」が着実に発展している姿を頼もしく思います。

昨今の高度情報化社会という時代の子どもたちへの影響。また、子どもたちの生活の基盤である家庭の変化。さらに不登校のみならず発達障害やちょっと心配な子の増加などの多様化する子どもの問題を前に、先生方が日々奮闘していらっしゃる姿に接するにつけ、先生方が心身ともに元気でいてくださることを願わずにはられません。こうした先生方、とりわけ担任の先生へのサポートが今、求められ、そしてその役割が学校教育相談係に期待されているのかもしれない。

私は今、「少しでも先生方や親さん方が元気になってくだされば」と巡回相談という形で保育園や小中高校へニーズがあると出かけてお話を伺うな

どのささやかな活動をしています。その活動のベースになっているのが「少しでもお役に立ちたい」という気持ちと、かつて、学校教育相談の諸先輩から育てられ鍛えられた「教育相談の心」です。相談者の言葉をよく聴き気持ちに寄り添う「共感」と相談者自身が自分の課題に立ち向かえるよう「勇気づけ(エンパワメント)」することを徹底的に教えられました。教育相談には、いろいろな説や手法や考え方があると思いますが、学校教育相談の大切な土台はこの二つであると思います。その所を踏まえつつ、日々子どもの問題、子どもを取り巻く周りの問題に対峙していくことが何より大切なことと思います。相談者と共にどう対応し、誰の力を借りどう連携していけばいいのか、といった問題解決への見通しをも含めて「知恵」が出てきます。

毎日、巡回相談をしながらいろいろな先生方や保護者の方々から小さな感動をたくさん頂いています。お話を伺った後の先生方の「もう一度頑張ってみます」と言われた笑顔や、保護者の方々のほっと安心された表情に、こちらの方が癒やされてしまいます。「学校教育相談をやっていてよかったなあ」と思える瞬間です。

学校教育相談係は、共感と勇気づけの教育相談の心を知っているからこそ、学校教育の中でその力と活動に期待されることが大きいと思います。

学校教育相談のさらなる充実と発展のために、会員の皆様のご活躍を祈っています。

☆ 支部研究会報告 ☆

◇定期総会・第1回研修会

開催日：平成27年6月13日（土）
会場：岐阜大学教育学部附属小学校

1. 定期総会

今年度の支部役員、26年度事業及び会計報告、27年度年間事業計画、予算案などが審議されました。支部規約については、顧問に関する項目を、追加した改正案が提出され、承認されました。また、理事長のあいさつでは、研究紀要第7版発行の紹介があり、「第8版発行を目指して日々の実践を積み重ね、書きとめていってほしい」と述べられました。

2. 記念講演

『心理治療を必要とするこの実態とその支援について』

講師：児童心理療育施設桜学館施設長
西村伊佐夫 氏

岐阜県唯一の情緒障害児短期治療施設について、対象となる児童、行われる心理治療、具体的な利用方法に至るまで、非常に丁寧にご講演いただきました。桜学館では、児童の早期の家庭・原籍校復帰を最大の目的として、児童指導員・保育士・石・看護師・家庭支援専門相談員・教員など、多種専門職の協働により施設生活のすべてが治療的経験の場とする総合環境療法が行われていて、その詳細をご説明いただいたことで、地域にある専門機関の実際を知ることができました。



講演後には次々と質問が続き、参加者の関心の高さが窺われました。他の専門機関との違いや原籍校の教員の支援方法など、実際抱える児童に関する切実な問題にもご

講演後には次々と質問が続き、参加者の関心の高さが窺われました。他の専門機関との違いや原籍校の教員の支援方法など、実際抱える児童に関する切実な問題にもご

助言をいただき、ネットワークが広がり、実践につながる講演会となりました。

(文責：大坪一才恵)

◇夏の教育相談研修会◇

開催日：平成27年8月29日（土）
会場：ハートフルスクエアG
参加人数：約80名

「だれもが行きたくなる学級・学校づくり」 ～マルチレベルアプローチを活用して～

講師：広島大学大学院

教育実践総合センター長

栗原 慎二先生

「仲間の力を使って個を支援する。」という発想で、「これからの生徒指導、教育相談、特別支援に予防的・開発的な対策がさらに必要となっていく。」と、集団の大切さや集団作りの理論を分かりやすく説明していただきました。



「集団づくりのプログラムを確実に遂行していくには、教員の『子どもを育てる』『力をつける』という教育に対する意欲が問われる。」というお話

は、先生から教員に送られた熱いエールのようにも感じられ、身の引き締まる思いがしました。また、集団づくりの中で

「色々な人とつながりながら問題を解決していきける子」をめざしていくために、「安定したパーソナリティ（心理的成長）」が形成される事が重要であること、「社会性（社会的成長）」は「安定したパーソナリティ（心理的成長）」がなければ育たないこと、子どもが「自分は大切にされている」「愛されている。」と感じられるように、良いことを沢山ほめることというお話が、印象的でした。

(文責：佐々木文枝)

日本学校教育相談学会主催

第27回総会・研究大会（大阪大会）

夏季ワークショップ

開催日：平成27年7月31日～8月2日

会場：大阪府（ホテルアウィーナ大阪）

<主な日程>

7月31日（金）ワークショップ（6コース）

全国支部代表者会

支部代表者懇親会

8月1日（土）総会、記念講演、研究・事例発表、

ポスター発表、自主シンポジウム

懇親会

8月2日（日）研究・事例発表、自主シンポジウム

学会賞・小泉英二賞受賞者講演

ラウンドテーブル

◎報告1 夏季ワークショップAコース（7月31日）

◇大阪教育大学教育学部 教授 水野治久先生

◇堺市堺区役所教育・健全育成相談担当梅川康治先生

「担任が元気になるチーム援助会議」

～立場やとらえ方が違うメンバーが

集まる会議を円滑にするために～を研修して

学校現場においては、近年、少子化が進む中で極端な放任や過保護に陥る親子関係、更に児童虐待やいじめによる被害が深刻化し、大きな社会問題になっている。水野教授による第1部講義では、これらの複雑な援助ニーズと様々な課題を解決するために、チームを組み連携して援助することの必要性が指摘されているにも関わらず、簡単ではない現状を知った。その背景には、相談したり助けを求めたりすることへの心理的な負担があげられる。その一方で、職員室の雰囲気やよいと連携がどんどん進むという研究成果の紹介など、チーム援助の有効性も教えていただいた。

講義から、チームで問題をよりよく解決するベースには、協働的な職場の雰囲気が何より必要であること、担任とSCや保護者がチームを組むケースや、教師だけでチームを組む場合など、いろいろな連携の形はあるものの、複数の参加者が相互に影響し合い、問題解決のためのプランを立てて実行し、そのことをその後振り返ることこそが大切であると学んだ。PDCAの営みが、チームを上手くコーディネートしていく原動力になる。個人プレーでは、やはり限界がある。関係

者全員でその運用上の理解をすることも重要である。

第2部梅川先生の講義では、チームで事例を検討する際の児童・生徒理解の方法や、応用行動分析を活用した具体的な対応方法をグループワークで研修した。相談者を勇気づけ元気にするためには、少しでもできることを探すこと“〇〇があるよ”と、今少しでもいいからできていることを話題にし、現状肯定することから解決の糸口を探るとよい結果を生むことを、多くの実践事例でご紹介いただいた。以下は、その配慮点である。

① 肯定的に相談を終わること

② まずは、しっかり聴いてみること

③ 決めるのはその人自身であることを認識すること

「ねざらい→ニーズ→リソース→協力→提案する」など解決志向型カウンセリングや、学校組織に介入する具体的な手立てを学んだ。今回のワーク研修で、「担任が元気になる会議」とは、根底に「リソース探しとその活用・拡大にあること」を学んだ。見方、考え方をちょっと変えるだけで、心がどんどん元気になると実感した。

◎報告2 記念講演（8月1日）

◇日本学校教育相談学会 会長 嶋崎 政男先生

『学校教育相談学会の「礎」「輝」「志」

～学会の「こしかた・これから」～』

本学会の誕生は、平成2年（1990）年。「全ての教師が教育相談の考え方をもち、予防的・開発的な教育相談を推進することを主張する」考え方が脈々と受け継がれてきた。なお、本学会は教育相談の推進者を目指すため、学校カウンセラーの認定は、現在も厳格な規定の下で実施されている。

阪神淡路大震災では、従来心の専門家である学校カウンセラーの果たした役割が非常に大きかった。このため、東北大震災でも大勢のカウンセラーが子供たちの心をケアするために活躍した。そこで、教育相談の在り方を協議した文科省の会議では、「相談室待機型から、対象接近型への転換」を求める声が相次いでいる。内閣府の子供・若者支援に関する会議でも、アウトリーチ（訪問支援）の有効性が度々強調されてきた。こうした議論に応えられるのは、児童生徒の身近にいるガイダンスカウンセラーのような存在である。カウンセリングの勉強をした教師が、教育の一環として相談にのる『教師カウンセラー』の制度化が望まれるとの指摘が各方面から上がっている。

（文責 佐藤 礼子）

事務局より

夏の教育相談研修会が無事終了しました

ハートフルスクエアGで行われた8月の研修会も無事終了することができました。80名ほどの多くの方々に参加していただき、とても盛況でした。

今回は、8月に本学会の会長に就任されたばかりの栗原慎二先生をお迎えして、「マルチレベルアプローチによる学級・学校づくり」(包括的な生徒指導)について学びました。

「一次的支援」・「二次的支援」・「三次的支援」については、教育相談を学ぶ者にとって耳慣れた言葉であると思います。それぞれに、何をしたらよいのかも、ある程度予測がつく方も多かったでしょう。

【欠席者の把握と早期対応、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携、ケース会議、対人関係づくりの授業(SGE、SST、ピアサポート等)】

これらはどれも重要であり、大切にしていることです。しかし、今回の研修会では、「一次～三次」までの支援を包括的に進めていく必要があるという話でした。そこを具体的な学校の様子などを通して教えていただきました。

栗原先生は、10年以上に渡り、生徒指導先進地域の海外視察を重ねています。その海外の様子から見て「日本の生徒指導・教育相談は遅れている」と感じ、「マルチレベルアプローチ」を提唱されるようになりました。

「まだまだこれからの日本は、生徒指導上、困難な事例が多くなる。そのような今だからこそ、早期の対応、包括的な対応が必要だ。」

世界の動きを見据えながらの言葉ですので、説得力がありました。是非、この動きが広がることを期待したいです。

因みに、栗原先生は、岐阜市の取組にも指導されており、昨年度から二年目に入っています。岐阜市の取組についても今後注目していきたいと思

っています。

「公認心理師」が可決

この9月に、国家資格である「公認心理師」に関する法案が衆議院・参議院を通過して、正式に国会で可決されました。近日中に公布されて、2年以内に政令で施行日が定まります。今まで、様々な団体による心理士の資格が認定されてきましたが、国家資格として統一されたものになっていきます。

詳しいことは、これから定まっていくことになりますが、本学会が認定している「学校カウンセラー」も基礎資格として認められるのか審議されることでしょう。

文部科学省が検討を始めている新しい学校教育改革の一つとして「チーム学校」があります。スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、部活動指導員など従来教員が担ってきた業務を他の専門家に委託しながら、チームとして学校を運営していこうとする動きです。スクールカウンセラーは、今後「公認心理師」がその役割を担っていくのでしょうか。学校教育をよく知っている「学校カウンセラー」こそが「公認心理師」になり、学校教育相談をフォローする立場になれば、より「チーム学校」が円滑に機能するものと信じています。今後の動きに大いに注目していきたいところです。

事例発表してみませんか

今年度の活動として、今後3回(10月、12月、2月)の研修会があります。どちらも「事例研究会」を計画しています。会員の皆様の中で、「ちょっと相談してみたいな」「詳しく教えてほしいな」という事例がありましたら、気軽に事務局まで問い合わせをしてください。お待ちしております。

(文責：事務局長 木村 正男)

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第15号

2015年(平成27年)9月30日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集：日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ：<http://jascg-gifu.net/>